

九十九里浜に由来する箭挿神社

やさし

蓮沼地区に所在する箭挿神社は、諸説は多々あるようですが、伝承によると、日本武尊が西岡集落の中央部に鎮座したことが始まりとされ、後世に祭られた源頼朝であるとされています。現在は、頼朝像がご祭神として祭られ、直衣にはササリンドウの文様がつけられ、源氏の定紋であることがわかります。



蓮沼地区にある箭挿神社

箭挿神社の由来は、伝承によると、治承四年（一一八〇）相模の国石橋山の合戦で平家一門に敗れた源頼朝は、相模国から海路を渡り、安房の国に上陸し、安房の国から上総の国へと勢力を養い、その途上に蓮沼地区に立ち寄ったとされています。



源頼朝像（木彫 約24cm）

また、別の説では、文治五年（一一八九）に源頼朝は奥州の藤原泰衡を討伐した後、鎌倉へ帰還する途中にこの地の浜辺に兵を休めるため、浜辺を遊覧し、南

の太東岬から北の刑部岬までの海岸線を、一里（約一六町・註1）に弓矢（箭）を立てて海岸線を測ったとされます。その距離が約六十キロから六十四キロメートルで、九十九里浜のほぼ中央に位置する蓮沼地域が四十九本目の矢が立ったので、・・・矢十本相祭小宮を建て、箭挿八幡宮と称し奉り候」と伝えられています。（蓮沼村由来分地録）

さらに、頼朝は中央にあつたこの社について里の人に聞き、日本武尊を祭神とする社であることを知り、先祖の源義家にならい、祭祀を行うために残った矢を束ね供物として矢をこの社に奉納したと伝えられる。その後源頼朝と合祀し、箭挿神社と称されるようになったようです。

この神社は、弘化二年（一八四五）に現在の社殿が建立され、蓮沼領主旗本の津田氏による創建とされています。また、頼朝像も津田氏が嘉永二年（二八四九）にご神像として奉納されたものであるそうです。



扁額表 箭挿社と彫刻

社殿にある扁額は、「箭挿

福祉団体を「紹介」 山武市遺族会

先の大戦が終結してから、六十有余年の歳月が経過しました。今日の繁栄と平和の陰には、苛烈を極めた戦

いの中で戦禍に倒れた戦没者の犠牲と残された遺族の深い悲しみがあつたことを、決して忘れることはできません。

山武市遺族会では、毎年、



南郷小学校敷地内にある南郷忠魂碑

市戦没者追悼式を靖国神社にて挙行し、悲しい歴史を繰り返すことのないように恒久平和を誓い、山武市の限らない発展に貢献することに尽力しています。

参考文献 蓮沼村史ほか

（註1 一町は60間）

社」と記され、下総・佐倉藩の藩士がこの神社の由来を後世に伝えるために、元治元年（一八六四）に扁額の表面に記し、広田彬が彫刻したと記されています。

このように、九十九里の名称に由来する神社があることは非常に興味深いものと考えます。房総には源頼朝伝説は多数ありますが、なかなかそれを立証するには文献だけでは難しいですね。

なお、源頼朝像と扁額は市の指定文化財になっています。